

特集

山野を田畑に

～上手稲にみる
明治の移住者の苦勞

上手稲は、現在の西町、宮の沢、西野、福井、平和、小別沢と呼ばれている地域で、明治五年に発寒村から分離した手稲村の三つの大字のうちの一つでした。上手稲開発に尽力した移住者たちの苦勞、足跡を追います。

礎

上手稲の開拓は、発寒に移住していた岩手県人の中田儀右衛門が慶応四（明治元）（一八六八）年から実績を上げたことが記録に残っています。しかし、この地域の本格的な移民と開拓の進行は、明治四（一八七一）年新潟県人五戸の西野二股付近（当時のベツカウス）への入地や仙台的白石からの集団移住といわれています。

仙台藩白石からの集団移住

戊辰戦争後、藩を追われることとなった仙台藩白石の片倉家の家臣たちは、北海道への移住を決意しました。難破や病気などにも見舞われる中、五百八十五人が小樽に上陸しましたが、収容できる建物が無く、開拓使の指示で、石狩に行くことになりました。海岸沿いを子どもも老人も手を取り合い、声を掛け合って歩いたそうです。その後、白石村へ移住した者を除く二百四十一人が発寒村に入りました。これを機に発寒村から分離

◆教育の先進地◆



▲三木 勉

明治五（一八七二）年五月、上手稲移住の仙台藩士たちを率いた三木勉は、移住者の子弟の教育も重要と考え、自ら教育に当たりました。カシワの木、カヤで周りを囲い、サクらの皮で「時習館」と門標を掲げました（右下写真）。

明治四（一八七一）年に函館に函館学校、札幌に資生館という公設の学校が開かれています。この「時習館」は、札幌地方の私設の学校形態としては最も古いもので、現在の手稲東小学校の前身に当たります。

「時習館」という名は「学※注ンデ時ニコレヲ習フ」という論語の一節から取ったものです。教える内容は、読書、習字、



▲時習館模型（手稲東小学校所蔵）

算術の学習を中心とし、特に、当時そろばんによる計算が主流であった中、三木は筆算を取り入れるなど、進んだ教育を行いました。その評判を聞いた近隣の地域からも多くの子弟が通ったとされています。

※注・論語の最初の一節「学んで時にこれを習う亦説またいふばしからずや」（意味・教えを受けたり書物を読んだりして学んだことを、折に触れて繰り返し学習することによって身に付けてゆくのはなんと楽しいことではないか）「三省堂大辞林」より



▲時習館記念碑（西町南19中の川公園内）